水谷公民館だより

編　集　水谷公民館だより編集委員会
発　行　富士見市立水谷公民館
富士見市水谷１-13-6　TEL049(251)1129・FAX049(255)9886
水谷公民館メールアドレス　fkm－mi@coral.ocn.ne.jp

6月16日（日）は父の日

私の父の思い出

皆さんにとって父の思い出とはどんなことでしょうか？
私にとっては二十歳の頃のことです。
当時も父とよく話をしていましたが、明治生まれの父と戦後生まれでの私とでは、年と意識の違いが大きく、話がかみ合わないことが多々ありました。父は、「その時になったら分かるよ」と言いました。父と同様に年を取り、子を持ち孫を持った今、しみじみと身に沁みるその言葉が、一番の思い出です。（辻）　　担当　辻・河野・彦根編集委員

◇父親に一番感謝していることは何ですか？（回答数:6,397名）（%）

項目	全体	男性	女性
今まで育ててくれたこと	40.5	43.5	37.0
家族の生活のために働いてくれたこと	38.2	36.1	40.8
困った時に助けてくれたこと	8.3	7.4	9.5
しっかり教育・しつけをしてくれたこと	6.2	6.8	5.5
家事（料理・洗濯など）をしてくれたこと	1.0	0.9	1.1
その他	5.8	5.4	6.2

「父の日」等に関する意識調査（2018年6月生命保険会社インターネットアンケート）による

楽しい時間

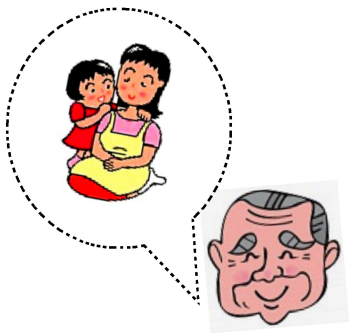
水子　Hさん（30代）

仕事が忙しい父親だったので、私が幼いころは一緒に出かけた記憶があまりありませんでした。大人になってからも、二人でどこかへ行くことがなかったように思います。
しかし、私に子どもができてからは、父と5歳の娘、2歳の息子と私で頻繁に公園へ行くようになりました。父は娘に木登りや自転車の乗り方を教えてくれたり、息子が「帰る」というまでとことん付き合って遊んでくれます。
私にとっては、好奇心旺盛な2人の子どもと外で遊ぶのは大変なので、父の存在はありがたく、何とか助けてもらっています。今、子どもを介して父と接することはとても新鮮で楽しい時間になっています。

孫との会話

東みずほ台　Tさん（40代）

僕は、4年前市内で飲食店を開業しました。心配性の父は連日店に様子を見にやって来ました。
数日後、父から定年後共に働きたいと告げられました。嬉しく思いましたが、やはり断りました。
思い返せば、10代の頃は厳しく、口うるさい父とはよく衝突しました。やがて、嫌気がさし、僕は家を出てしまいました。長い時間が掛かりやっと良い状態となった父子関係が、関わりを深めることで、再び壊れるかも知れないことが、怖かったからです。
ところが、父は諦めず、ある日、小学4年生の孫と店の一角でこんな話をしていました。
父「ママが毎日仕事で寂しいでしょ？」
孫「…　まあね」
父「ママがずっと家に居たらうれしいでしょ？」
孫「うん」
父「だからお爺ちゃんがママの代わりにお店で働けば良いと思うんだ」
孫「それはダメだよ！」
父「えっ？」
孫「いい？考えて！お客さんが来ました！お爺さんがゼーゼー言って働いています！みんなどう思う？イヤでしょ？」
父「ダメかな…」
孫「ダメよ、ダメダメ！」
そこまで言わなくてもよさそうなものですが、その日、父は妙に明るい表情で帰っていきました。
そして、これを機に共に働く話は口にしなくなりました。
お父さん、いつも心配かけてごめんなさい。少しでも安心してもらえるようがんばります。
いつもありがとう。



憧れの男性

東みずほ台　Sさん（30代）

優しくて、頼りになって、まっすぐでお調子者だけど、怒ると本当に怖いっ！
九州生まれ九州育ちの私の父は、絵にかいたような九州男児です。
そんな父に守られ、育てられた私は、生粋のお父さんっ子で、昔はよく二人でいろんな場所に出かけたりもしました。
そんな時、父はいつも嬉しそうにいろんな話を聞かせてくれたり、こっそりお小遣いをくれたりと、私は父を一人占めにできるそんな時間が大好きだったことを思い出します。
今では、大分県と埼玉県でわかれ、遠くてなかなか会えず寂しいですが、私は父のように頼りになるパートナーと一緒に暮らしています。
きっと父は私にとって、尊敬できて、憧れの男性なんだと思います。

父の免許

水子　Tさん（50代）

私の父は、40年前自動車の運転免許を取りました。家族で旅行をしたことはありませんでしたが、日光にドライブに行ったことはよく覚えています。
他には、秩父の方面へよく連れて行ってもらいました。どこかで、花の便りを聞くと、今でも母とドライブに行きます。
しかし、父は今年で84歳。夜や雨の日は無理せず、運転をしなくなりました。
今年は免許の更新をせず、返上することを決めた父。父の決断に、家族は安堵しています。これからは、私がお花を見に父を連れて行こうと思います。

父のカミナリ

東みずほ台　Iさん（70代）

明治の生き残りのような頑固でワンマンな父親で、子どもたちには、いつも頭からカミナリが落ちていました。
父のカミナリで一番怖かったのは、子どもたちが与えられた手伝いを忘れてしまった時でした。
その手伝いを忘れて家に帰ってきたらカミナリ。その後は、裸にされて外に放り出されたのです。今でも、その時の情景を忘れることができません。
その反面、やさしいところもありました。当時は珍しかった二眼レフカメラを父は持っていました。それで、アルバムいっぱいになるほど写真を撮ってくれました。
改めてアルバムを見ながら久しぶりに父のことを思い返せて、今回の機会に感謝しています。